



## 「ジェームズ・ボンドは来ない、マダム」 を生きる少女の成長小説

吉田伸子

Nobuko Yoshida

ジェームズ・ボンドは来ない

松岡圭祐

KADOKAWA 本体1400円+税

瀬戸内海に浮かぶ小さな島、それが直島だ。人口五〇〇〇人にも満たないこの島が、「現代アートの展示スペースとホテル客室を備えた」ベネッセハウスの開館と、同時に開始された「直島コンテンポラリーアートミュージアム」というアート活動によって注目を

浴び始めたのは、一九九二年のことである。コンテンポラリーアートにも、コンセプチュアルなホテルにも、それほど魅かれるものがなかった私にとつては、当初、「何か、瀬戸内海のほうに、シャレオツなスポットが出来たんだ」ぐらいの認識しかなかった。それ

から二十数年、今では直島の名は、日本どころか世界に轟くまでになっている。本書はその直島を舞台に、実話をもとにした物語だ。始まりは、八七年の冬、世の中がバブルに浮かれていたその時、岡山に本社のある福武書店からやって来た人物が、直島の島民に、「直島文化村構想」を説明し始めた時、臨月の妊婦が突然産気づく。その妊婦が産んだ女の子、遥香が本書の主人公だ。物語の真ん中にあるのは、遥香の、地元直島への愛だ。コンビニも病院もないこの島を、何とかしたいという遥香の成長と、直島で「007」シリーズ新作の撮影を、という大人たちが打ち上げたプロジェクトが並行して語られて行く。その二つがクロスするのは、直島の民生会館で開かれた、「ボンドカー展」だ。前を通りかかった遥香が、

サッシに貼られたポスターに目を止めたことがきっかけだった。

その「ボンドカー展」、実物の車が並んでいるのかと思いきや、会場内にはクルマの絵が描かれたパネルのみ、というしよぼさ。けれど、その展示ではなく、会場に貼り付けられたサイケデリックな色彩のチラシ——シルエツト状に浮かぶ、拳銃をかまえた男性と、パーティードレスをまとった女性——が、遥香にはカッコ良く映る。そのシルエツトの男性こそが、ジェームズ・ボンドだ、と遥香は知り、「007」シリーズの撮影誘致運動についても知る。

クールな映画の舞台になり、世界的に有名になれば、島も発展していくかもしれない。これは我が直島が「生まれ変わるチャンスだ」と、遥香は思う。そして、言う。「やりましょう！ ジェームズ・ボンド、直島に呼びましょ

う！」と。私も協力しますから、と。遥香は、一緒にいた中学からの友人である柚希を誘う。「島が豊かになったら、お洒落な美容室もできるかも……」と。

そう、当初の遥香の目的は、直島が今よりも都会になることだった。普通にコンビニがあつて、普通に病院があつて、と。生まれ故郷が、お洒落な都会に変身することだった。そこにあるのは、思春期特有の、「ここではないどこか」と似ているのだが、ちょっと違う。遥香は「どこか」へ行きたいのではないのだ。故郷の直島が、「どこか」に変わって欲しいのだ。生まれ育った直島が好きだから。

直島にジェームズ・ボンドを！  
「007」シリーズ最新作を直島で！  
というムーブメントの顛末は、実際に本書を読みたい。『007』赤い刺青の男記念館』の設立や、ボンドガ

ルコンテストの実施まで盛り上がった島民たちの願いは、果たしてかなえられるのか。

本書を貫いているのは、どこか、ではなく、「ここで」という遥香の想いである。その想いは、物語の終盤でぐつと効いて来る。二十五歳になった遥香は、ある事情から、ボンドガールコンテストに出ざるを得なくなる。そこで遥香はこんなふうスピーチをする。「007の世界に近づけるなんて夢のようでした。でもいまははつきりわかります。島が変わる必要はありません」と。わたしたちには、わたしたちなりの発展形があります、と。

本書は遥香のこの言葉に辿り着くための物語だ。そこがいい。そしてそれは、松岡さんの直島への、ひいては第二、第三の直島への愛、なのである。